

# 寂室元光の禪風

——隱逸幽趣の禪——

中川徳之助

不求名利不憂貧 隱処山深遠俗塵 歲晚天寒誰是友

梅花帶月一枝新 寂室

## 山水修道

寂室録・示元參禪人法語を見るに、

古人云、參須実參、悟須実悟、是故善財參五十三人知識、汾陽參七十余員知識、大凡仏祖以來、發大機頭大用、立宗旨建法幢底人、麤有不從參之字上出頭來也、汝諱參也、身亦処參禪流輩之中、尤宜奮志勵精不憚跋涉、尋師拈友、忽爾撞著聲頭宗匠、喫尽惡辣鉗鎚、直教妄識妄情、和箇妙解妙會、一時蕩除、然後做得灑灑落落、超宗越格、俊快伶俐活漢、豈不偉哉、

と、師友を尋ね拈んで参究し、聲頭の宗匠の鉗鎚を受けて出頭する参禪者の一途を述べ、

其或未然、泯絶萬慮、放捨諸緣、把一則無義味話頭、四威儀中無少間斷、參去參來、說甚十年五載、假使百劫千生不悟不休、如是信受、如是操守、謂之真本色道人、

と、十年五載にわたって一話頭に参究し、禪道に専心する真の本色道人の一途を述べて、

若離却如上二途、於諸道業無一所弁、終日閑散游談無根、荏苒空過一生、依旧輪転六趣、偏為徒有參禪名、全無悟入実、可愧可畏、思之勉之、

と法語を結んでいる。山水の間にあつて修道する「真本色道人」の一途が注目される。示是乘知客法語にも、

上古之禪衲、韜晦千峯幽巖深澗之間、得身世而忘、與草木俱腐者、不可勝計矣、吾仏亦説、欲求寂靜無為安樂、當離闍闍獨処閑居、乃至若於山間、若空沢中、若在樹下閑処静室、念所受法、勿令忘失、何況叢林衰替、看不上眼、苟有意弁道之人、望彼境界、当如畏虻蛇之窟避蠱毒之郷耳、雪舟乘知客、徧歷京師相陽諸刹、嘗尽寒酸風味、而乃私衣遠引、圖卧林丘、去秋來此、與同志五七輩、聚首蝸屋之下、過一冬訖、猶嫌山之淺、且欲從深入於深、其高尚之趣、足以可喜也、大抵学道之要、最貴明心、明心之捷徑、只在生死切、生死切則頭頭物物在在処処、無非為我之警策者、何必仮求師友乎、露声山色、白雲青松、凡属見聞一一為汝助發禪機妙用者耶、所以古人云、欲識本來心、青山緑水深、又云、心外無法、满目青山、思之勉之、

とあり、生死切なれば頭頭物物、在在処処、我の警策たるにあらざ

るもの無く、谿声山色、白雲青松、一一に禪機の妙用を助発すると  
言う。京師相陽の諸刹に修道するは世の常であるが、自然の山水の  
裡にあつても禪の熟すべきことを述べている点が注目される。法語  
中に「大抵学道之要、最貴明心、」とある。「心を明らかにして生死の  
疑團を打破し、己事を洞明にしてわが心性の本来に生きることは、  
そのまま「明心」を得ることである。寂室録にも「疑来疑去、忽爾  
疑情破、則頓見本来面目、明徹本地風光、」(奉答再賜手詔)「崖  
去崖来、心無所之、忽然如睡夢覺、如蓮華開、如披雲見日、」(答  
鎌倉源左典厩)「参去参来、忽爾照徹萬法根源、」(示真照居士)  
「参去参来、斯須少間莫有退志、忽爾打破漆桶、心華發明、照十方  
空、」(示正印大師)などである。寂室が教えを受けた中峰明本の  
語録にも「但能信取一箇話頭、密密参取、亦不必問其難易、久之心  
明性徹、則難之與易不勝其贅矣、」(示靈叟古首座)「心本澄邁、  
元無汚染、工夫亦無做不做之異、一切施為只要悟明自心耳、」(示  
澄禪人)などある。このような「明心」は谿声山色の間にあつて、  
よく透徹し得ると寂室は言う。示秀格禪人法語にも、

汝年雖甚少、出言頗以老矣、常語道友云、某甲、忝慕先哲煨芋  
垂涕、移茅入深高風之久、異時必須索我巖谷之中、其志尚誓則  
固善、惟恐遠離師友、無聽提誨、閑遊安眠、甘墮庸輩、汝当深  
念、空山閑爾有便弃道、生死在呼吸、如何虚度日、幸有現成公  
案、今拏示汝、僧問古德、如何是清淨法身、云、山華開似鏡、  
澗水湛如藍、又問、深山巖崖還有佛法也無、云、石頭大底大、小  
底小、猛著精彩看、是什麼道理、蒲團倚椅之上、良不在言也、  
採薪拾葉、鋤圃汲谿处、正好参究底時節、忽爾透得祖関、發明  
己事、謂之自証自悟活道人者耶、

とある。懶①や大梅法常のごとき先哲の高風を慕つて山林独居の禪  
に参することが、師友に遠離して提誨を聴くことを失し、閑遊安眠  
に墮する恐れのあることを一方に警めつつも、空山閑爾として弃道  
に便あり、採薪拾葉・鋤圃汲谿の生活の中で一話頭に参究すること  
によって己事を發明し得ることを説き、かくして出頭し得た道人こ  
そ「自証自悟活道人」と言うべきであると説いている。

山水の裡にひとり修道することによって、「真本色道人」「自証  
自悟活道人」となり得るとする寂室の考えは、一には禪が所詮己れ  
自らとの対決であつて他者の介在する余地の無いものであるという  
信念に支えられているが、さらに一には山水の幽趣を愛する性向に  
も支えられているよう。後者について考える。

「石澗説の冒頭に「余性喜遊山水之間、」とあるが、この類のことは  
は寂室録に多い。関西の蕨圃叟が永源寺を訪ねた時、寂室は七言絶  
句を贈っているが、その序の冒頭に、

老拙一生寄幻影乎山色水声之中、邇来經由古江飯高山下、林溪  
幽澗頗懷野情、因築室數椽、安眠燕坐、只因居此俟殘喘尽耳、  
旋有愛葉空閑之道流、憧憧香鬆、松根石上誅茅散处、蓋物以類  
聚、所以理之合然歟、

と、自らの一生をその性向のままに生きたことへの感慨を記してい  
る。なお、この序中に蕨圃叟の言として、

昔辞親離鄉之日、自謂、吾早粗大方、撥草瞻風、依懷良導善  
友、晨夕咨參、究明己事、報父母劬勞之恩、酬佛祖覆蔭之德、  
幸獲挂錫名藍、荏苒十霜於茲焉、同関伏臘不下五百衆、屈于  
要挾其一人、將為言行之師、何止若撥波求火也哉、凡属見聞、  
非唯焦敗菩提種子、殆可滋潤輪回業根、深知今時一日出随于

衆、万劫失利乎己之必矣、因憶、古人法席全盛之時、尚逃名跡累、荆茨石室果食澗飲、終身與世邈如、譬聞、為僧須是居巖谷、又云、榔栗橫担不顧人、直入千峰万峰去、吾今忝攀隱哲之勝軌、私衣遠引、永歸雲山深更深处、乃竊自誓、寧可將身投火坑、不復脚踏巖林闢、寧可窮死荒蕪下、不謂搢紳豪富門、寧可枉遭斷舌災、未悟不妄談般若、

とある。身を火坑に投ずるとも巖林の闢を跨がず、荒蕪下に窮死するとも搢紳豪富の門に謁せず、断舌の災に遭うとも悟らざれば般若を談せずと誓い、古の隱哲の跡を慕って山水の裡に晦迹しようとする蕪聞叟の志向は、寂室の志向に合致する。「予聽其詞至当痛的、不覺涕下、嘉歎久之、」と寂室は記しているが、さながら彼自身の志向を蕪聞叟の言に托して述べたごとくである。

曆応四年（一三四一）七月六日、夢裡に死せんとして遺偶を写し、覚めて記した作、

錯把黄金鑄鉄牛 草肥烟暖臥林丘 今年五十有二歳 且喜不耕  
還見秋

貞和四年（一三四八）の写懐の作、

青鞋蹈履變春山 病翼倦飛今已還 慣待宿雲分半榻 日昏猶未

掩柴関

また、親応元年（一三五〇）、長勝寺の命を辞した時の作、

嘉音兩度到林齋 驚起午眠開竹関 寄語龍峰下頭角 一生放我  
得安閑

など、その他「疎慵老頭陀 一生投丘壑」（贈積侍者）「身老尤宜居世外 雲閑只合臥巖隈」（憶友人）「餘生贏得安丘壑 青眼看他統祖燈」（再用震巖和尚韻）とあるなど、山水を楽しむ自然に晦迹

しようとする志向は、寂室の生涯を通じてあらわれている。

自贊の詠というものは、禪僧が己れの依って立つところを端的に表明しているが、寂室の自贊には山水に寄せる心を詠じたものが多し。つぎに掲げるところである。

幻身不全 神光虛円 一生甘自齋晦林泉、誰是替吾堯靈燄 仏  
燈再得照人天

高世釈迦 不拜歌勒 流行也得 坎止也得 一生独自媿 水声  
與山色 莫嫌幻質不完全 且愛眉橫遠鼻直

咄者衰翁 禪也缺參 道也絕學 縦目雲得 寄身林壑 咸言大  
覺破家孫 寔是仏燈跨釜子 若何得箇傑秀人 扶起吾宗已湮墜

全身半身 日月閃面 鏡上幻塵 空裏閃電 而今老矣歸関画  
依前早是新羅箭 退藏放癡慈 誰言拒住院 眠雲知幾年 看山

長忘倦 我儂活業只恁麼 一生担板愛自便  
林泉為家 猿獍作伴 眼中有煙霞 胸次無涯岸 從來智體全不

具 宜乎幻影亦缺半 嘆 渠是誰也 天地之間 只一箇疎慵癡  
頑寂翁老漢

幻化空身 鏡像水月 百年一夢 終歸變滅 你儂教我入函関  
久住煙霞山水窟

焚香默坐古岩陰 最愛青山深更深 除却同參木上座 誰知這老  
此時心

貧觀瀑泉飛 独坐巖陀石 絶無人往還 幸免話今昔 一片雲添  
百衲衣 萬重山点雙眸碧

このような、山水を愛する心は寂室自ら言うごとく生來のものである。そこには、「懶踏利門名路驪 千峰影裡独凝神」（密叟侍者遠自都下建仁）「末法僧中誰可尊 紛紛多走利声門」（再用

震巖和尚韻)に見るごとき、名利声誉を眇視して方外に遊ぶを喜ぶ  
氣宇と、「青松爲屋廬 苔石作牀筵 但得佳山水 求居養幻軀 平  
生深耻被人識 豈料今朝入画図」(自贊)「退而忘進 黙爾泯玄  
寥窅終日 孤榻倚然 生平誓不游人世 只在白雲峯下眠」(自贊)  
「大廈高堂我無分 松根石上逕家風 茫茫塵世誰知己 欲去西山問  
亮公」(自贊)「誰將麗妙紫金襦 包裹愚夫血肉团 恐被傍人看便  
笑 不如送在旧青山」(自贊)に見るごとき、人に知らるるを深く  
恥じる恥羞の情とが絡みあっている。答実翁和尚の書簡に、

細味來論、区区痛責愚林下掩閑懶於趨世、又云、風雲際会以磨  
峻擢、夫何見期太過、何以敢當、自非厚存撫、則安得到於此  
耶、勝勝銘感之至、愚壯歲隨衆之目、東西班列尚以不敢措意、  
何況大焉者乎、是無佗、蓋深自量已知分也、類齷幾乎耳順、蒙  
昧與年相稱矣、当初所得於師友者十不記一、好一箇藥物、天壤  
之間鮮有我願者、独頂山居兄、平日道義不寒、退與此廢院子、  
素有山田數畦蔬圃二三畝、分甘作箇禿頭老農、躬耕手種、聊以  
卒歲、亦足以自娛、云云

とある。自らの分を量って、世に立つを避け、禿頭の老農として山  
田・蔬圃にわが生涯を托そうとするのである。「櫻芋の畑をして戸  
外に放たしむるなかれ。」とか「溪流に菜葉を流して人に知らるる  
なかれ。」とかの、深居を勧めることが寂室の法語に多く見られ  
ることも、併せ考えられよう。

山水の間に遊ぶを喜ぶ性が寂室にあるにしても、山水裡に晦迹  
するを勧める寂室のことばが、その性向にまかせて発せられている  
と考えるのは皮相であろう。そこには、すでに述べたように、「真  
本色道人」「自証自悟活道人」となるべき参禪の途についての信念

がある。この点に閑して、わたくしは、行状に見える、つぎの記載  
に注目する。

殿之異位有僧堂、師曾榜之曰、坐中警策、只不可過惹衣敲席  
耳、痛以竹篋行事、則或動他心念、恐壞道義、各菴遵守此法  
式、深所庶者也、

禪と言えば棒雨喝雷を思う常識がある。寂室の當時においても、  
又云、一代藏教文、拭瘡故紙、千七百公案、腐爛葛藤、忽遭人  
問者如何是禪、便豎拳下喝、怒目撐眉、胡乱支撐去、甚者罵仏呵  
祖、欺神瞞鬼、撥無因果、無事不為、謂之地獄滓、仏也難救、  
(示真源禪者)

とあり、一般の師家の禪風はこのようなものであった。寂室の榜に  
言うところ、この風潮に背馳する。

思うに、寂室には生來の思いやりの情がある。行状に見える「七  
歲鄉閩群兒釣小魚、纔得之則屬師護焉、師謂、此魚雖爲微物、皆有  
命之属也、其可忍殺哉、悉縱、群兒佛然矣、」の記事もその一つの  
あらわれとも言えようが、寂室録に見ても、答倫上人・答実翁和尚  
などの書簡に知られる参禪者への思いやり、また、答実翁和尚の書  
簡に知られる先師鍾愛の弟子についての配慮、また、たとえば「那  
堪別我下層巒、風前倚杖独立久、織龍蒲鞋莫留連、再扣柴扉問暮  
年、」(贈英侍者歸省詩)などの詩に知られる日常の人間關係にお  
ける愛情など、いずれも他を温かく包むような思いやりが示されて  
いる。今一例を掲げる。

学道之士、先須慎護身口意、屏除貪瞋癡、視名等浮雲、爽利如  
蕪土、出言也要祛詐偽虛妄、立行也要固穩實端潔、任遇世間種  
種違順境緣、一一収在夢幻空華之中、然後以己事未明、常自勉

勵、古人尚不容剪爪之暇、吾是何人也、在再一生虛度光陰、乃能抖擻精神、奮起志力、精進上加精進、勇猛更添勇猛、朝參暮參、行究坐究、一旦漆桶連底脫去、頓見本來面目、撞著本地風光、謂之出家行脚本志一時酬畢底解脫自在活納僧者耶、你輔子住菴、七更涼燠、自一掃庫下、到今不憚那寒隆暑、備嘗艱辛、動役於井臼蔬圃之間、敢不違寧居、料想、你日用工夫為之不致純密、若令你道業不克成弁、職我之由、督歸于誰乎、從今日去、菴中卒歲之計、都不要介懷、切望、把生死大事須臾不念、耳、老拙力写此葛藤、以代勞憊云、(示嗣道禪者)

前半の叙述は、寂室の修道の綿密を示している。法語を需められて、他の話頭を拵し來たつて己れのことばに代えることの多い寂室が、自己の修道の心構えをかく率直に吐露しているのは、嗣道禪者への愛情のあらわれであろう。それは、後半の「料想、你日用工夫為之不致純密、若令你道業不克成弁、職我之由、督歸于誰乎、」の叙述と相応する。示秀格禪人法語に「大凡為人子者、稟父氣分、天下古今所以理之令然也、」と言ひ、「汝入余室、為余法子、然癡頑疎慵之性、與余輩<sup>②</sup>不差、益感夙生師資緣熟焉、」と言ひ、かつ、この弟子の修道に資するために自らの実践を記述しているのも同様である。寂室の思いやりが、單なる甘やかしの温情でないことは、禪道を「大丈夫之事業」とする信念からも察せられる。きびしさは、師が弟子に課すべきものではなく、弟子自らが己れに課すべきものである。たとへば、示従本禪者法語に、

汝萬一見許掛錫、當須先以三年為一期限、足禁出門、脇慄到席、口絶戲劇、意離攀緣、只二六時中、綿綿密密、參究死了燒了、那箇是我性之語、既遇如此師、得如此友、居如此便當所

在、汝在彼不弁道業、更可待何日哉、其或游州獵熊、看水觀山、徒喪時光、全非予法厲者耶、異日雖歸來、斷不可有相見之分、従本勉之思之、

とあるのを見ても、鍛鍊のげしい気魄が感じられる。己れ自身とのきびしい対決を避けることは、禪者の名において許されざることであり、その故にこそ、他の道念を無用に傷つけることのない思いやりが、他方に要請されるのである。

僧堂の榜に「坐中警策、只不可過惹衣敲席耳、痛以竹篋行事、則或動他心念、恐壞道義、」と記した寂室の意図は、ここに存したと思われる。寂室の説くところ、棒雨鳴雷の禪ではない。たとへば、葉すえの露が深更の月の光りをおのがじしにやどしつ凝縮しているごとき禪と言えようか。おのがじし心性にやどした月輪を凝視する、張りつめたきびしさを内在させる禪である。己れとは何ぞという疑団に自己をぶっつけていくところには、いささかの妥協も無く、一切の便法の介在もない。そのきびしさを知るが故に、「我」は所詮「他」に没交渉であることを知る。道念の傷つきやすさ、明心の曇りやすさの機微を知るが故に、静かに道念の熟し、おもむろに明心の澄むを待つ要を知る。このような道念の純熟、明心の澄徹を思うが故に、示是乘知客居山法語に説くごとく、寂室は山水の間における修道を重んじ、みずからも都下の騷塵を避けて山間溪辺の月明を愛したのである。

### 詠月澄心

寂室元光の山居に幽趣を楽しむ生活を一点にしばって考えるとすれば、詠月の作に如くものはない。

寂室が月を愛したことは、自贊の詠に、月に托して自らを語ることの多いのにも察せられる。繁をいとわず列挙する。

水中月影 華裏春容 画虎成狸 喚蛇做龍 甜瓜棚上苦胡蘆  
德山臨濟粥盧都

心光不昧轉團⑧ 且喜夏安能得安 簡是本來真面目 夜深山月照秋寒

心心心 夜來古月照霜林 禪禪禪 無角鉄牛飛上天 是則真我為鏡像 非則閑梨全老僧 黑蛇三尺閑在手 吞却乾坤似不會 視利等塵埃 儼名同桎梏 残月落遙峯 孤雲老空谷 諸方浩浩

說高禪 孰與渠假伸脚眠  
這担板漢 甘老岩叢 一榻默坐 萬緣皆空 聞劬住院言 幾乎洗耳 猶見宗教替 為之捶胸 有時江湖入夢 夜寒月照短篷

称意金鱗直鈎上 絲綸翠斷白藕風  
參橫月落湖山曉 全露本來清淨身 丹靑汚却虚空面 冷地從教笑倒人 笑倒人誰識真 試自威音劫前看 曇華方綻一枝春

身披積服 手搦蛇心 独歩方外 眇視叢林 只貪風高月皎 都忘水寒雲深 這般一箇曠浮圖 古往今來見也無

無相為真相 無門為積門 擬欲尋蹤跡 水中探月痕 画不成時正好看 全身逼盡尽乾坤

咄者老漢 漆桶不快 為人百醜千拙 渾無一智半解 只飽饕餮安眠 白雲辺青山外 是什麼報緣 幻身不完全 不完全却周円

月到中秋光滿天<sup>月</sup>

これらの自贊の作に詠せられている「月」は、感覚的要素を捨象して、観念的に扱えられていると言えよう。すなわち、「水中月影

華裏春容」「簡是本來真面目 夜深山月照秋寒」「心心心 夜來

古月照霜林」「殘月落遙峯 孤雲老空谷」「有時江湖入夢 夜寒月照短篷」「參橫月落湖山曉 全露本來清淨身」「只貪風高月皎 都忘水寒雲深」「幻身不完全 不完全却周円 月到中秋光滿天」などの表現の裡に扱えられている「月」は、その底流に感覚的な体験の支えがあることは認めるにしても、「寒」「霜」「皎」などの語が形成する観念世界に位置づけられ、清浄法身の形象のようにさえ思われる。

寂室が人に与えた道号にも、耕月・江月・釣月・潭月・月翁・月窓・月屋・月山・月舟・月峰のごとく、「月」の文字を付した号が多く、また、道号頌に「月」を詠ずるもの十四篇を併せ考えても、寂室が月に心を惹かれていたことが察せられよう。道号頌の中から若干を掲げる。

渺茫楚水拍空流 潮撼錢塘夜不收 玉鑑光寒萬波底 依前天上  
一輪秋 (江月)

古今誰下蒼龍窟 漶漶如藍萬丈深 唯有寒蟾光皎潔 夜來依旧  
落波心 (潭月)

水輪高輾碧天秋 光透虛樞灑氣流 内外玲瓏常不夜 如何著得  
睡獨猴 (月窓)

巴未巴前眼豁開 茆茨爰作玉樓台 縱超物外南泉老 不許敲門  
推戸來 (月屋)

巴未巴前須著眼 屋頭青山(嶺) 広寒宮 若徒光影那边看 雲  
鎖煙籠千萬峰 (月山)

靈山語與曹溪指 只在平常光影辺 峭峭巍巍高著眼 通玄孤頂  
一輪円 (月峯)

これらの道号頌に詠せられている月も、自贊の場合と同様、観念

的な形象として扱われている。たとえば、月屋の道号頌に「縦超物外南泉老」とあるのは、馬祖の「惟有普願独超物外。」の語を受け、月峰の道号頌に「靈山話與曹溪指」とあるのは、玄沙の「且如道吾有正法眼付囑大迦葉、我道猶如話月。曹溪豎拂子還如指月。」の語を受けていることなども、禪僧としての観念世界の中で月の形象を扱えていることの一証となろう。

月にむかう寂室の心には、上述のような、月に托する観念の形象があった。と同時に、月の美しさをすなおに愛する情があった。

凝滞頓釈 瀉灑落落 電卷星飛 龍驤虎躍 疎慵老頭陀 一生  
投丘壑 同志遠方來 慚愧管水壘 酷愛移茆入深 蕪火煨芋標  
格 古風不振久之 林下年年蕭索 千峰玉立掃秋旻 冷翠岩屏  
掛飛瀑 今朝君已下苔巖 誰共同看山月白 (贈釈侍者)

備前要侍者、偕予寓但之金藏山、冬迄于春、忽一日辭往京師、俚語以代畫別云、

子伴病夫金峰索窻 对雪攙爐口辺生醖 三玄三要懶商量 四句  
百非渾刻卻 今朝又逐春雲歸帝鄉 何日相逢共看山月白  
二詩ともに末句に「看山月白」とあって、その点では類型的とも思われる表現であるが、それぞれの詩について見ると、この四字の表現には、それぞれの侍者に寄せる深い愛情が滲み出ている。「山月の白き」が、観念的にと感覺的にと分かちがたいままで寂室によって扱えられているのである。

思うに、寂室の月を愛することを、いくつかの箇条に分けて考えることはできよう。月の感覺的な美を愛したのであると言えるかもしれない。月の観念的な心象を愛したのであると言えるかもしれない。あるいはまた、山水を喜ぶ性向のあらわれであると言えるかも

しれぬ。しかし、このような箇条のひとつひとつは、それだけでは寂室の月を愛することを充分には言い得ていないように思われる。葉すえの露がそれぞれに月の光りを湛えて凝縮しているごとき、人おのおのが自己の心性を静かに深く凝視するところに禪の本来的あり方を説く寂室元光の精神の内的世界と照応するところに、寂室の月を愛する心があったとわたくしは思うのである。

彌天永釈に与えた自贊の作に「身披釈服 手掬蛇心 独步方外 眇視叢林 只貪風高月皎 都忘水寒雲深」とあった。叢林を眇視して山林に晦迹するを志した寂室の作に月を詠ずることが多いのは当然の傾向とも考えられるが、自然の風光の裡にあって月を詠じた作に佳品が多いことには、上述のことが考えられる。

借此閑房恰一年 嶺雲溪月伴枯禪 明朝欲下巖前路 又向何山石上眠 (書金藏山壁)

風攪飛泉送冷声 前峰月上竹窻明 老來殊覺山中好 死在巖根骨也清 (同)

禪人來計贈行篇 暗把枯腸苦搜索 渾無一句可呈君 月照空山秋寂寞 (贈橋上人遊方)

十有年前問故人 相看把手語如春 爭知此夜眠疎跡 月射寒窓風撼筠 (夜宿千光寺)

風攪寒林霜月明 客來清話過三更 爐邊閑飭忘煨芋 靜聽敲窓葉雨声 (寒夜即事)

白雲峰下青松塢 一夜空房坐到明 露洗秋旻月初上 郎忙問訊老師兄 (夜宿龍聖寺)

賢姪石欄特來訪 相陪旬餘 擘爐談話、甚感道義之篤、今又留偈而別、老拙不免、依韻謝之、敢望④爾、

聞寂空巖霜夜月 群蠶庵裏老夫情 明朝子又下山去 何日重聽  
敲戶声

與翼姪訪石塔客居

道人踏雪問寓舍 月照寒窓坐對牀 瓦鼎烹茶春一盞 豈同政老  
橘皮湯

可是憑君振祖風 曾聞宗說兩俱通 莫言千載知心少 且喜今朝  
同志逢 藏裡摩尼照樣宇 金剛宝劔快機鋒 徹骨傾倒無生語  
月上遙峰古澗東 (次韻酬提藏主)

老弟特來瞻拜、偶師兄暫出、便欲歸去、而日既夕矣、一夜  
独坐西軒之下、聊述五十六言、以摠所懷云、伏希<sup>⑤</sup>爾、玉  
潤師兄和尚几下、

老龍隱是我知心 特問幽栖入澗林 宝杖凌巖何處去 空房投宿  
覺更深 照入山月全顔色 洗耳松風正語音 可謂這回真会见  
明朝春昏下青岑

余忘年端友悅雲峰、一別二十有餘載、夢寐想念下曰、一日  
忽扣巖扉、執手話旧、相得甚權、而亦見惠妙傷、唱歎之  
餘、依韻奉謝、

蒼顏白髮經年別 彼此昔人非昔人 今夜肝腸傾下尽 曉牕霜月  
落水輪

これらの詩を見ると、さきに自贊の作について述べたような、  
「寒」「和」などの語が形成する觀念世界に把えられた月と、眼前  
の美なる月とが表現の裡に重ねあわされている。目と心とで把えら  
れた「月」の美がある。

贈龍岩油藏主と題する作がある。

貞治癸卯仲秋月夕、余忘年友于光徳龍岩老兄、特特遠來見訪岩

居、相得權甚、同下錦監亭上觀月、余謂龍岩曰、靈山指曹溪話  
等、且置不論也、寒山子云、吾心似秋月云云、正是秋月今夜盞  
目最好、只吾心実未知其所在也、然龍岩將酬簡語之頃、時有山  
童侍旁、敲松根歌曰、心心心向何處尋、山中闌寂良宵欲深、皓  
月高懸虛籟滿林、溪声潺潺激玉鳴琴、石女木人起鼓舞、虚空開  
口笑吟吟、余励声詞曰、休休小子多口、二人携手歸庵就寢、翌  
旦授箋記焉、以贈龍岩公云、

貞治二年(一三六三)、寂室七十四歳の作である。言うところの  
小子が、現実存したか、寂室の虚構の産物か、知らぬ。しかし、  
小子の口を借りて語られている月は、宗教的な觀念世界に光りを投  
じている月である。「小子多口」として小子のことは押える寂室  
の行為には、「正是秋月今夜盞目最好、只吾心実未知其所在也、」  
のことばに知られるように、ことさらの宗教的な言挙げを押えて、  
美的な感動にすなおに身を委ねようとするところが見られる。

石磧説と題する作がある。この文は、山水に遊ぶを喜ぶ寂室が、  
一日、同志兩三輩と尿後の山の美景を楽しんだ時のものである。寂  
室は同志に言う。

即謂同志曰、坐吾語汝、古隱士竟掛屣世、遠尋雲山棲遯空谷之  
中、考槃寒溪之上、守志堅確、天翻地覆、不移不転、心源淵  
深、歲積月累、彌清彌澄、唯差世人知住處、亦恐声名流江湖、  
而今回觀石磧、與古隱士之道貌頗相逼似也、汝意謂何如、  
すなわち、山の景趣を古隱士の道貌になぞらえて賞する。同志は  
駭して言う。

同志払袂起笑曰、老夫実豈耶、若但謂酷愛彼石磧天生清絶佳  
致、則良以可也、引古隱逸、偷庸比倫、何其言之訛詖如是、豈



復非好事者哉、

この問答を叙して後、

余失所対、椽面而休、夕陽已懸木末、相呼而婦、翌旦泉煙來相訪、論著同噉次、話及乃事、泉云、或号吾石欄、驛議所出、正欲來從老夫而聞其說、幸希記山中所見所語、在石欄字尾矣、余曰、前所言者、是同志所捨、汝用是奚為、泉云、彼已非我、我亦非彼、彼我各異、用捨寧同、余不獲已、授毫書贈云、

と説を結んでゐる。文章の修辭を考えると、問答を垣々と記述して、率直に心の動きを示している。ところで、同志が寂室の言を駁した時、「余失所対、椽面而休、」とあるが、何故に寂室は應對の語を失して、椽面して杜口したのであるうか。山の景趣を古隠士の道貌になぞらえたことが、何故にそれほどまでに寂室を自責せしめたのであろうか。しかも、泉煙の請に應じて石欄説を記しているところをみると、寂室の椽面が深切な自責に発したものと考えることもできないのではないか。

玉村竹二氏は、その著「五山文学」に、「一方中国禅林には、元末以来、念仏禪が流行し、それに伴って隱遁的な思想を生じた。」

「杭州天目山幻住庵の中峰明本や無見先觀、楚石梵琦などが、その中心人物で、殊に中峰、無見は隱逸禪者の代表であつた。」「就中、近江水源寺の寂室元光、常陸法雲寺の復庵宗己は、この思想を忠実に伝へた代表者のような人で、大いにその門戸が栄えたのである。」と記しておられる。中峰明本の禪風については、今、論ずる用意はない。天目明本禪師雜録を見ると、懷浄土詩一百八首や勸念阿彌陀仏の詠があり、また「我愛水雲常自在、任運逍遙無變改、直下千山成遠流、遠対斜陽散文彩、水無心兮雲無心、只此無今蓋無

古、」に始まる水雲自在歌、「半生幻住西天目、每愛好山如骨肉、破鎗無米不下床、瘦腰三蔑從教束、鄰翁白日來打門、且笑且言声滿屋、」に始まる松花樓歌などの作があつて、玉村氏の所説の適當なるを示唆するように思われる。そして、贈龍岩油藏主の文に「小子多口。」と言ひ、石欄説に「椽面而休。」と記している寂室のことばの底に、隱逸禪と呼ばれるような己れの禪風に対する省察があつたのではないかと思う。「余性喜遊山水之間、」（石欄説）と自ら記しているような山水への心の傾斜が、自然の裡に晦迹して己事究明に沈潜する宗教的管みと、自然の美景に恍惚澄心する文芸的管みとが、隱逸という生活形態の中で分ちがちがたく共存することへの自省があつたのではないかと思うのである。寂室の詩に、

九月十三日遊田原村、投宿茆舍、同來諸弟皆曲肱就寢、獨開窗觀月、聊写老懷耳、

戊子季秋將半日 田原村裡宿烟蘿 看來五十餘霜月 幽興不如今夜多

寥寥清夜適幽情 蘿月松風孰共爭 不覺敲欄舒一嘯 知音只有曉鐘聲（戊午云云）

中庭無人月自明 索索金風入衣袂、旋拾落英盈地香 冥鴻声遠情何極（中秋偶作）

月到中秋最利害 使人特地惱閑情 一年三百六十夜 輸却今宵半刻明（同）

のごとき閑情を流露する作がある。それは、

野興催人青昼長 行看岩院滿庭芳 僧從玉樹陰中過 鶯在瑤葩重處藏 擁砌応添山月色 飄窻又助瓦爐香 老來好景難多遇 眼醉風光心欲狂（室山看花韻）

の作に見るとき、美に対する感受性を已事究明の禅の基柢に保ちつつ、隠逸の禅風を形成した寂室の生き方の一面を考えさせよう。

——広島大学教養部教授——

本文の①から⑤の数字には左記の文字がはいる。

- ① 珠貝
- ② 秋厘
- ③ 結
- ④ 單
- ⑤ 展